



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ペットロス症候群」という表現の与える印象
Author(s)	木村, 祐哉
Description	要旨の出典：北海道獣医師会雑誌, 2008, 52巻8号, p.107.
Relation	平成20年度日本小動物獣医学会（北海道）. 平成20年9月12日～平成20年9月13日. 虻田郡洞爺湖町（北海道）
Issue Date	2008-09-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35513
Type	conference presentation
File Information	kimura-2_abst.pdf, 講演要旨



演題番号：

演題名：「ペットロス症候群」という表現の与える印象

発表者氏名：○木村祐哉¹⁾

発表者所属：1) 北大・医・医療システム学 所属

1. はじめに ペット喪失（ペットロス）後の悲嘆反応が重度な場合について、特に「ペットロス症候群」と表現される場合がある。この「ペットロス症候群」という用語は、医学的に「ペットを失うことのダメージによる精神的・身体的不調」と定義可能であるが、この用語を用いることについては賛否両論で、社会的な認識が高まるなどの利点も考えられる一方、単純な病名に一括りに収めるべきではないという意見や、マスメディアなどによって差別的な目的で用いられるという意見などがある。表現の是非について検討するためには、まず「ペットロス症候群」という用語のもつ影響について把握しておかなければならない。そこで本研究では、「ペットロス症候群」という表現によって受ける印象を網羅的に把握することを目的として、質的な調査手法による検討を試みた。

2. 対象と方法 想定される反応をできる限り広く把握するという目的に適うよう、自由記述式質問紙法を用いることとし、調査対象としては医学的な専門知識を有する学部と、その他の学部の大学生をそれぞれ選択した。質問紙では「ペットを亡くした飼主に医学的あるいは社会的な問題が生じることについて」と「「～症候群」という“病名”を用いられることについて」、それぞれ自由な意見を記述するように求めた。得られた記述文章は、内容分析の手法に基づいてコード化し、さらに KJ 法によるカテゴリーごとの配置を試みた。

3. 結果と考察 本研究は統計学的な優位性を検討するものではないが、調査対象の属性の違いにより様々な意見が得られた。「ペットロス症候群」と表現されることに不快感を抱く者もいるということが明らかとなり、そのことから、臨床の場における良好なコミュニケーションを達成するためにも、言語的な検討が重要であることが裏付けられた。また、ペットの喪失により問題が生じること自体に驚きを示す例が多く、未だにこの問題が社会的には十分に認識されていないことが示唆された。今回得られた所見は、簡便ではあるが一方向的な調査方法である、質問紙を用いたものである。今後、より信頼性の高い意見を引き出すためには、相互交流的な性質を有する面接調査が有効と考えられる。